

繡像  
復讐

山石見英雄錄

四輯

一

遠

2509

33-22





遠門  
2509  
卷 35-22

南海 水原玉藻畫圖

渡仇英雄錄

全部 七册



浪花  
書林

文榮堂



奈利如々昔々亦如良乃我  
 園毛神世波遠々成尔討昌可  
 南堂打須無々乙波世乃移利  
 行在思尔人乃加多出小歎左留  
 加字波佳尔尔毛以波寸牛母  
 汗亦寸卷々(書武南木々々  
 亦亦草紙物寸良伊波々加也

通文華英雅錄日編卷之二



奈年唐不利尔福之計佛  
 其比尔於各可之卒物也流加  
 以之多支見留良年人之和以多  
 免乎志良福彼麻奈支玉乃幸左  
 南心年發豆於計起大亦亦支  
 惠美之普利尔魏乃多支  
 亥利都之世農次如古河也之卒

朱才也留平也此去路隱利人  
 玉深奴之加物也流榮紙之正  
 之卒君斗臣乃加之古美於  
 也同胞乃親英友加支乃字流  
 波之美才天比斗乃圍乃幸之  
 一車加良之古進能 皇國乃  
 神亦加良之支保善道亦音



止々々 算無料 尔種々乃倒語  
 遠南年支波免良 禮者留  
 芽天多々 共免天太之 計尔也  
 东奈尔 乘能 黄門乃 濟之 路  
 畫左 禮々 与利 尔乃加多心  
 有人 之波 朝日尔 句善 花寺九  
 尔以也 第壹 志之 尔尔 立 歸 昌

免道也 字为 之 支 種 比 止 南 武 止 能 加 計  
 波 之 尔 波 加 之 流 年 善 利 尔 安 尔 过 之 波 何  
 加 夫 可 道 乃 於 支 昌 尔 生 以 採 尔 止 作 尔 尔  
 止 多 尔 加 以 於 九 流 南 利 計 里 嘉 永 四  
 止 世 紀 之 以 考 冬 乃 日

美也古山岳宮人

楠本楠麻呂 矣



英雄録第四輯人物姓名目録

卷中人物備像にて綴像を省く者あり或は備像も無く文中このそ見ゆ者あり

將相 足利義榮 ○足利義昭 ○佐々木義賢 ○三好長縁

武士 植松光朝 ○建部秀明 ○伊藤巨 ○九鳥多九郎

村松清太夫 ○村松清三郎 ○桶尾成成 監物 ○赤堀時廣 主

天山言遠 双口郎 ○臺石五郎左 ○穴太八之丞 ○金谷左四郎

岡野三六 ○野村新十郎種季 ○伊藤門生八名 頼乃今這処り

僧道 大龍和尚 ○鐵牛道人 ○藪崎思庵 ○無名氏 女流 長江

洋見 ○奥海 ○葛見 ○晚梅 市人 鷹尾屋甚五 ○才輔

縮屋小紋治 ○折二 ○林屋竹松 奴隸 實作 ○濱七 ○篤二

忠六 ○三木助 ○易助 悪棍 根幹伊雁左 強人 大江免頭太

根幹曲松 ○鯨隼助 ○小織馬四郎 通計五十一名 此餘小大坂岡助と森山安平二人のみ







阪基洋見

伊藤巨濟經



村松清大夫茂蔭

幸崎長江

村松清三郎茂樹

可及桂... 桂... 日... 角...

復... 言... 英... 銀... 四... 綱... 卷... 之...





洛西行者鐵牛道人

縮屋甲幹折三

東洋書院刊本

第參三



植松莊兵衛光朝

赤堀主膳時廣

天山双四郎高遠

復讐言英雄録四編卷之一

端修二





悪棍根幹伊雁太

強人大江鬼頭太

引用書目

兵家茶話

老人雜話

外史

讀史餘論

諸州先くまに記

輿地路程全圖

國郡全圖

丹後國圖

治亂沿革圖

殘櫻記

逸史

應仁武鑑

湯嶋道之記

竹生嶋詣之記

近江國大繪圖

丹波國大繪圖

但馬國圖

湯嶋の圖



繪本復讐英雄錄四編總目錄

壹之卷

光朝賺暴琵琶湖  
茂蔭誘客辛崎浦  
二世辞官田舎先生  
七人結黨武者修行

貳之卷

高足男陰挾猜  
一才子暗奏捷  
赤堀毒手擊少年  
郵松丹心進勇士

參之卷

秀明輕裝訪老友  
光朝大勇拉衆敵  
遺書楯尾巧託病  
慮禍植松速告別

四之卷

洛外山路壯士斬三克  
湖西村莊姦徒殺面善  
傳函信新霜召茂樹  
忍問謀老奸囚植松

五之卷

贈直言豪士論公私  
積陰德富高傳兒孫  
光朝扶遺孤伴京寓  
種季更舊稱過越州



卷之六

卷之七

索宿仇野村逢生人  
得新知鐵牛話舊事  
崎人救危當掛夜月  
賈客免難黑原山曉霜

二首絕句種李感詩人多情  
三年古話折三說惡棍無賴  
伊雁太偷符節遺他日歿  
新十郎斫竹篋留一代譽

總目錄終

繪本復讐英雄録四編卷之一

光朝縣暴徒  
茂蔭袴容幸清浦

是村の素世ハ蒞菰のいゝと乱まゝ一ツ宿居して故も敵も或  
と濂ト兵と持る人多うりり粵に下総正結珠々の人  
氏を極松庄多清光朝と呼まゝと奪ふそが幸も終に  
力いふ衆の衆と抜と勇ハ万丈のそと奪ふそが幸も終に  
るまゝの古下野屋の押成仗より結成府の軍友系多郷  
より七世の孫小山下野大極政光が三男結珠上野外光の  
彦流うゝとありとどいつと小家奪へて地帯に久し  
浮浪人なるよ登く双親と老いて審く一と栖小徑果ん





も朽腐し固く下と控歴て武術を修練し其其傑出  
 出あひるの躰尾少漸く傷が志とちさんどとあひ起し  
 つ嶽立しん武伴の年と控よりらん承祿十年少い亭心  
 方に三十回を貨賂脱く眉あは法黎くして控あを  
 うり才材傳ふ六尺小竹り実小凜くする英風はをりて  
 ちるれ丈夫も時おし給さうや仕友も申うど既よああ  
 この玉と控よさるも務まる樹の人よもをど控ふさあ  
 勇徳必おふを法徳の水も湯となるあ毎月の以し  
 三日の弓矢月の村とりあうる夫毛にあして坂田那を溪の  
 港ふたどり来ふさり遠是本編前輯の結句ふ尺七し若  
 凡重を命後継者が加賀の玉竹橋の駅なる延命寺に宿り

ゆる時より一年さあああきと光然又後より  
 孝と脚けく大勇と震ひし一張本と記さんる形は始ふ  
 況半ぬ然而光然一の勇虎又憩ひて湖西の方へ後んと  
 折しもお疾より泊り居る和本の浦へゆり少船小使置得く  
 同舟の人多うる中に和の表と俄く甲幹小管下僕まで鈴  
 刺する侍婢の婚婿さうよ妻を女と具しさうハ京乃豪  
 高なる七捨のるよ六七名長と腰刀と横(或ハ太刀の端  
 と天さぬに面杖つとて刺後よ四凹窄しと居並ひり面  
 貌の増さげううん何の地の浮浪人ぞ多化て公醇なる莊  
 容形瘦て及さげなる老法取憐まなるわり可笑あり傷  
 う程く打潰るひつ多量湯と竹生湯とたちよ尺巻て飄る



さう水程の約み里許もろん小己牌をささ其のそさほぐこ  
うと異うろふ風さへなるまは何まも倦困ドめの中は  
の意高の形と後け「襦袢と解せ」耐え出「後」  
おふ号と拂ふ酒の意と巡らし主僕のもろの傍をさへ  
にも侷めいと奥ドぬ彼をい四十の足あへさるが情  
性うや彼甲幹小強りさ友三粒の着に酒許と別の  
に分ちて小僕ふよおせさく私尾のうくに居る人  
与へん生活なりとて背と曝し之拳執く芳といさ  
熱あさうに去ば私長い志く収び一宴ありてそが  
あててけけうそ獲さる朝一四と終小酒してそ側へ携へ  
取りて厚く恵と謝するあぞけ方の主僕も打収び倍飲と

おたりと起んとさるる私長の袖を扱へて壺をさへた右  
さうろふ酒濁く者と共さ飯まる舟と添んとて私長い  
飲くいと多さるく私尾小居り「總角」なり我子と味て  
畜一酒一樽と持来ると言とけ方の押めそい又壺  
をりお措てよとに恒の中に総角が酒一樽と扱扱げ小  
扱げつ、日底又架し「輪」の邊の上をおむむぞふいり  
あしてり美是し「邊」の上よ平強て「踏」御さ座「懸」居  
し一の武士の形と際と際と美よさる酒樽の邊の懸居  
「懸」るやどよ地さるさ「你」親傍の武士の形さへ撲地と中  
て吸口や脱らん血とせふ送る酒の流まさく座と浸せ其  
座の武士高「高」さ「驚」さ「怒」り酒樽さく「水」を「投」り



何奴なるまはけ根藉容一がごとと苛愛言く罵るるも我  
船首ふあはじ船長の如來る我子と情ふ居く狗安くは  
あひしぐんを定めくあはくし捨るのけ方にむり言ふ  
の吾孔のまき子のとりあそれ廣く心むて免させあへと  
言せも果ては瑞ある一名桂一鼻のあくらむとにあれを  
紙りてまうと塞一の血とあるとくくく一鼻よかされる  
細愛志ありて情を評帝め武士の面よお擲て刺へあま  
なる元志氏の氣と激く不款奴小笠なりとて打措  
んや子く引出世御踏おくゆるせんと怒る後の一人も  
柔の氣のそりの列座の朋友後とも言ど腫ともいふは忍  
よ妙酒海一と家つらぞよ我居服と見え忍後不目よ

鬼見口んいざや墓石氏小笠奴と引どり來り極を殺て  
甘むよ紀あはむやと叫ぶふ忍きて泣ふより父いせく  
あくらなく遠慮の愛殺せく列位の敵くら情は家  
めあひまると贈るよ冷界うくう教よ昔その大漢子あや  
下舟小笠一並の罪をうんや家あより京の市人小笠  
鞠して同トあなる武士と侮り政の上なる遠の庇と  
我田となく踏揺一藝芥と被らせ一教と親とてむご  
まうせそとあつ四人もや嘯て事好ま一死形状の事乃  
紀系ハ京のある町人とあつわらふと怒く控して獲りの  
せん肉意うやあらん然ハ墓石元太と叫ま一友人の  
勢い益得く殆ど事と破んぞ勢ハ京の町人の甲





復九英准録四編卷之一

五



江州  
極松  
庄  
去  
湯

西 米 可 也 時

復九英准録四編卷之一

五



幹謀共身と記し来て言と錫してとらぬそのとを附且  
 列佐の夜の酒は汚ましよとえより其の茶夜をれい事  
 に就し易し洗着更の料の取の湊ふ忘らりて其小  
 朝へをうせん小形ふん是と安石納うせぬと他の事  
 とも身にかへて公若しその形りて河は移も是ふ事  
 二人喧嘩や致を蹴らうと面を撲まし武士の恥を為さ  
 夜もて懐まんや海を渡る小笠と料理し呉んと記する  
 と吐喉とぬむら取長とくこと跡外し際除く船首を  
 方へ引んととらる服ざり控悪なる勢ひは女をい言とも  
 臣法人を去るべきと失い例杖奪まし一適まんと思へどせ  
 まれ船の中まきく淫術もなうらうる南不袖と捨るの同小

居る榎松遊去清光船の言のよりおとも言であつる  
 が足難て海をま出た各一時の怒の程は四座まともすべ  
 船子想夫の礼小疎とい懐しむは是らまで況や事更の  
 過失とまらも咎めあつるゆゑ一雨不任の浮浪  
 人名告も為許より人む其礼の免しあがし彼此のさび  
 に降せ許しあり互の幸ふらんと初短く説きおるに後  
 まこと見せどと激つお人その心留ぬお版の河うる傍も武  
 士の互小救ふと守りあると却く彼おと助る備前の備侍  
 こその體しそと除まよと進むお移も世も勅せと互小  
 脚くる武士の道とて説く俺派をいほうふ守るや凡  
 武士より者の人の故をよ我ふ加へし不致なうはの膳うる法



世々許さるも怪いあぬと偏よりたふと言罵るい自ら余  
 侮はじと好で能とかい申すに似るはし且市人松子なん  
 と匹敵ならぬ者小對の老實なりと他の徳侍りやあらん  
 此のふちうあひやく  
 ともとお救あうと武士のたふ若く若口のた若あく文あし  
 あひそく常ぬ奔舌口強ちけ方の三人より強る甲人も若り切  
 けりの各細滑く高くをそとわぬの強備之面白肩より  
 義つけあ士のとならば吾偏若もたふ勇もなく智もあは  
 者とつえころく七家妻形が古と揺さとも下司堅子ふ匹敵と遊  
 らしむ能と書ぐて人ふ面と對んや出と匹敵ふはぬぬあを  
 形推んい老實はしとい理なりいふも彼奴い許しきんが他  
 の徳侍と言はしは徳ううは足下の狗ふあうゆの鼻尖ふ

申さるる也徳の意を完太の友人ふ力を保せ我くと侮らわ  
 敵と刃を減と務負と改せんえ惚あまとりくに罵て太刀  
 の柄系吟渾一豫除後げたふたより遍若く暇へ強  
 ころ中奥不座ころ修工強ぬ沈勇あう強じとくふ  
 知く如く武の文字の文と止る義うらむや強が程年よ刻  
 戦と勇して強細の仇小命を強ごるい豈人と威体とる大  
 勇ならんや今我皇の世法家士を用るの時をりるぬも主  
 と選びては丸と結め文と保ごる功と建まん才とて益  
 なるものとおぬふそと數面程り畫せと義門強が極松も強  
 むが力はし柔静強はの塚系ト強が流流の人ふふふぬれど  
 いまが法家の得失を考ふと完め強を各ふ強強んしと強



是米をくいのあまど 雌雄を試やらんが 船中を鬧し 舟人を懸  
 ませんの 役あるあまきと 吃とお途と 刃を切り 彼あふ 言われぬ  
 わり定て 人なると 交ならん 只今 彼あふより して 我んふ  
 一審 約まよ 端もあまきと 約と 固むる 壯士の 度量 船中も  
 良唱と 静めたり 却て 時移りく 船本の 里の 今一里 許りも  
 ぬめらん 舟の 端の 言われぬ 北なる 言われぬ 言われぬ  
 廿二日 舟中なる 二の 言われぬ 言われぬ 言われぬ  
 既小 船の 側小を 付ぬま 在る 清光 朝七人の 事ふ 向ひの  
 中 け 船より 船中の 目撃 又 杖く 我ん 中へ せん 船中 付りく 天ふ  
 舟を せ 臆あし 支度あまきと 言果く 船路 又 向ひ 鼻紙袋

と 扱し 素若 戦死 せむ 屍の ように 強ひ 埋む ぞ 穢く 孤客  
 の 用ひ 小舟 ありて いろいろ 死と 違ふとも 事の 妨げ 多し 交券  
 に 我姓 名 出ぬ も 記し ころ 物も 共よ け 内へ 納む 事 裏に  
 容 匿し 金 子と 銀 貨に 充る 事 是れ かん ます 舟人 舟中  
 今 素若 彼人 こと 我と 刃 指て 後の 活柄 小 せし こと こと 言  
 つも 舟 搦へ ころ 種を せ あまき 稔の 舟 小 衆へ ゆる 彼 七名 の  
 浪人 未 後 まで 不 免と 死 じと ち 連く 舟と 固め こと 我 者 じ  
 と 一 巻の 書 又 跳り 上り 足 場と 易り して 船 路 又 光 船の 裏 衣  
 の 裾 まで ごと せ ちて 搦 刀に 太 刀 帶 割つ 種 又 つく きて 一  
 丈 餘の 長 楫 ぬき 換 ぬ ぬ あり ちと 徳 人 片 嚙と 吞 ちて 舟  
 舟に いて ちと 擧 例 して 呉 人 ごと 舟の 楫と 舟の 衆 舟に



突卓の閃一闪と飛うと忍びし「ふれい」推し推し船の  
忽ち岩とさうまて揺くと船本の方へをむくぞこの船は  
ぞ悔しとれと悔しし七人の愛づくに果眩り来りて揚  
頁と変せどやわいふ糸が怒りしや船底せよと罵  
叫びて飛のうらも間の「さ」船と腹で怒ると光船の楫  
と小娘小擁でり「飛」糸う海を来る者もあふは絶然  
と腹を死てまなぐと我者と元より感もなすうらな無涙の  
死戦といふで好んやト流の極端の死るものぞとさうら  
に「さ」りつ「水」も風の長吹出るふ役り好く「ま」帆「揚」て  
颯りゆく船の中なる人々の「さ」地して「網」の糸と  
拂い「光」船の智勇と感して「教」初らぬる右程よ「船」を  
然の面と笑ふと「橋」舟「舟」の鼻紙袋と「さ」つと「さ」が「教」りの  
も「更」なり老う若うの別なく同舟の商人「一」番「光」船「さ」  
首てみる「教」びと「さ」ま「さ」る「さ」が中「に」彼「家」商「の」別「若」に  
謝「僕」の「京」六角「老」の「例」は「船」と「船」で「さ」程「さ」る「と」呼「れ」は  
り「是」を「う」の「甲」幹「女」助「と」呼「ば」ぬ「目」と「あ」り「う」ら「と」信「が」書  
き「女」さ「へ」紙「借」せ「け」般「長」渡「の」西「親」許「り」役「り」さ「さ」る「船」大  
溝「ふ」莉「室」の「父」母「を」る「者」を「と」信「ん」と「て」役「官」と「ゆ」る「は」船「中」  
不「意」彼「人」の「情」激「ふ」後「の」さ「さ」女「児」者「と」具「し」る「か」う「い」  
く「く」寒「心」は「り」し「よ」大「人」の「仁」義「の」智「勇」も「て」さ「さ」る「の」が  
さ「さ」一「事」の「己」性「の」幸「を」さ「さ」る「船」の「河」う「さ」ま「さ」る「傳」し「も  
君「の」何「雨」の「方」さ「さ」る「や」船「の」大「名」を「さ」せ「さ」る「し」り「船」へ

君の何雨の方ささるや船の大名をさせさるしり船へ





復元英准録四編卷之一

菅玄清



復元英准録四編卷之一

光朝みつともが  
即すなはち智ち  
七しち齒ぎ城じょう  
賺すなはけ  
以も



宅らせあめそくは妻小の母はり我家又運ぬありんや且仕  
友の心室もは産するが公武の法家ごぬのそなうんは近畿  
列候も市録の役臣多うりた小お小ぬ意うそ我うこれ  
族の受とが耐めあへと妻小主僕のみ愛ふそめを光朝  
香と難言うく難言いと辱く舎意依りうり是足下にも  
妻小と具して西郷と訪うそこの程と我侍りまんは互  
ふふ役のゆ後「お金意がぬ我うまはは難言又難言りそく  
きううは難言よ上らんそのあひかど傍て厄まうも園りは  
らんと言つても懐紙の別て探り極松庄き傍光朝と「官」  
名刺と「官」他日と約てううはなむふ意も園り行候  
の筆をらして信が極意書してとりうりぬ程もなく言候

川の落は力湊なる南松本に急ぬまは光朝は旅人小別と若  
て迅速うい岩に上りくゆくも阿戸川を渡り大津まで  
流架那白旗の羽の南なる小松の町とせんとせうぐけ  
側西のかつひ山うそ揚梅の瀑近う入へ比良の言も春遠に  
聳へ東の湖小橋く名匠多く澳の鳴山後さかく健意よ  
男と急うく心地していつまぐ午牌の急も急う一怒めて  
夕陽候不夜涼しそたを初んとそ町尻の極意に入ぐ急意  
しつ活を急て涼の亭の探りや浦風と序勢よ受て湖上  
の急を急めてをり初る小ふけ者なる湯の涼子を暖く  
て押用と入来る一巻の武士の極意せう一年のふ十のよと  
三り四り入ぬうんと是うそさぐ席ふ若て極松の大人いと世



礼ふりくどもはねとまうひては「松金」推察し「野」すまひ  
 子ぬまのたね唐橋の深のひまうて 村松清吉史茂落と  
 うく者ふいと名告れ首く面ごうい今日松中うて徳久人  
 をまひいご先ころこへと席ををていりり用うて業と区  
 来りぬあやと同ふ茂彦河と更ぬ僕も今般雨要きて江  
 北清井那金吾川と姉川のりりりり里一卦一海路に  
 けり留し取うその強授ハ彼一勝の案の事にはけ黄白と  
 獲せんを郷うやと業思ふよう一むバ整一担て他ふ刃の  
 事業実ふ意ううううううううううううううううううう  
 大人のお解あふりううううううううううううううううう  
 る武士の例は妙く食禁の計術のうううううううううううう

うらぐ控うとひなく懸一あふに義の勇士の慕りく相  
 人の座うてたおの暗標の差なくと故意とそ内府人一に  
 別ままつり彼う尾屋をふふふふふふふふふふふふふふ  
 人の名判とも一換一ぬかくてふふふふ別まつく専一僕  
 と将く路と急ぐやうふふふふ君の宵影と見たりううう  
 ねぶ小跟て専に糸じい担て高深中夜つ我あり又紙か  
 はるぐさ方もありてふ又後小後活仕らん業が一人の男  
 史清三郎の名と茂樹と取て今産い子十八歳一乗付  
 一度大人ふね湯うせ彼が生涯の森標ともなうん教務  
 とも史せやにいうで我家へ豊原と希ふうううと添え  
 あつと湯うて産き清も実うううううううううううううう



呉らとも情の因にゆきそを厚き又世推余口んと共に  
 信ふを信ふ信が言ふ信ふ信を交信あらん今世に異とこ  
 けく申の別あるはより及よ出く吾屋へ信ひまわりかんと  
 故く彼方へ出くるが程なく田舎ふゆり来て客店に嫁が  
 里へ来る酒者と所嫁まぐ按撫べさくめて解ふ極松  
 小盃乞つ献納ま湖上の名匠と指懸一信の暇を産  
 と時しも其の言候よかき言り唱り出つる言ふはま  
 籬と乱せる白返のつり来るのそり日若比良の山風細と  
 為し来る程そそわき者打戻わさうくと他船とうどは  
 湖の面の岸の早らぐやく水煙らう清くさふ友戸と候  
 て信ふふての晴らとをわやどふ日を言くく及の湖く中と

めましく風々まそとく吹暴て樹根と穿し石とをを夜  
 ゆらとに苛やして吹舞りぬかむに男ふ光船も茂茂を  
 終ふまうど宿りそりおま日然ふ村松の溪七とつる僕り  
 光船が袂裏とも搭籠せお今と出るに本日ひぬるふ吳と  
 天とくより晴ぬまの臨次打傳あて後妻とて舞とて信  
 信とま新の信と信めつて豊田の馬のお連て汗とて信  
 夜川もよて久しと千代菜ふおま名のある幸松おを  
 年時候ゆり来る信が信宅よ信どつる妻の長江その子  
 信三郎を樹信た小倉信大方なうどりそり  
 二世孫官田舎先生  
 七人信雲武者彼行



却親村松清大支重蔭が今般極松莊多清光如と傍  
 事情とるに南村本國で復蒲生親親音寺  
 の故よりて世ふ六角殿と移くも依く本源正大御孫  
 賢親長い徳と流るる累代武雄の名家にて近に一國十二郡の  
 肉滋野言崎 粟本野洲蒲生神崎愛智 伊香 甲賀 轉  
 野洲の東と蒲生 伊香の南の嶺とも移せし又  
 の南の嶺なり 伊香の嶺と移せし又  
 水の地と上坂田 伊香の嶺と移せし又  
 依く本を既ふ襲へて依りて興まる麻井氏を盛りて中経も  
 故系久改武威に濟ふ者ふるも江南の嶺の義賢如に  
 依りて威名傳く者ふ及ぶ依りて勇武の士と振  
 るく時なりと傳る小け幸崎の漢ふをうぬ因とて滋賀

親なる坂中の里小伊養且所經とて武藝師範の志士あり  
 父を常力知松と依るも伊豆の國人とて越前所  
 利政知々小依一が彼家滅亡せしより其れ小流離てけ  
 地ふ来り後檢級とて人小教へ奉と經る程小親孝子の徳を  
 ても子多うり且其國さる南高杉如信志づくるも  
 くれども二君小依へぬ操りて輝して依へとるがりたを  
 一藩士士の教授料ふとて月俸と奉に支度若平の金と  
 賜へ時くお湯と免さんて悉ての後ふ率ぬを子且所經ふ  
 えて家富者へ必吉の礼符も厚うりしふをさう以又く六角  
 家より辟るくに且所經も父の志と終る止あ身来よ獨  
 とおの憐れんが頻の憐命を獲て終一が老年多病の身に



久バ勅仕の若に儘ぞり程不降免と取りなむ武者修  
 行の事時々備束者多く久バ終く候へん久バ四圍  
 儘づも勇士と推挙けり久バ言上口々に義興  
 然居まると許さん久バ村松漢方交の弱冠時を  
 直が又帯刀知能ふ剣術と學び久バ姑子漢三郎  
 樹の今直滿經が存ふる久バかれば茂蔭と漸經とい  
 以親し久バ程不降經が情形と久バ又村松も久巴に  
 ちあまど家儀に程不敏古角家久巴又社の因より軍用  
 金とも献りぬ久バとりて敏へも相湯と許さん家長老  
 列不擬へら且に國書と被んと有致とて極秘忠告が本  
 事いのみまど知る終ぐも船中とての奉勅庸人なると

美ゆらうぞ具して我家へゆりしなり去々程ふこの日  
 夕餐のころ久巴主人清方と茂蔭の極秘忠告が休らひ  
 一客廳ふ入ると田表の座席ふ存る直滿經が久巴と巨細  
 に語り出その程む地方の故村なまむ今日の内うと最の  
 以守して務ひ中久巴にして迂強くもあう久巴し久巴を僕  
 江北ふ赴く教目と終り中のされ久巴久巴又公端まつて並に  
 久巴久巴なまむ掛島清らうの毎日ふ彼ふへ毎の事ひんが  
 久巴の案が久巴を度ひ師をとり脚業の患ひあるを以て  
 濱島場への果敢く久巴出あり久巴ともねと怪うも久巴  
 極を不目して病癒り久巴とあり久巴なまむ不を中久巴  
 素大人不倍の事あり久巴久巴緩く我家とて旅の号と





植松彦去信



村松清孝史

湖西の酒店  
村松茂隆  
石屋  
光物  
誘もんとい



烈めのあふし「明日の伊弉諾」へ消見ふも命トて  
 夫人のうす被方へやきんと若小漂ふうそ被ねむいうふ  
 とそ君が居る居るいあうそて謝してそそるはたしちあ  
 体顔復死そは或者被りて唱へて私書と結ひはぬの  
 子と横切らう一野七名の浮浪人捨刀白打殺の衣  
 着よ又獲持し強烈序と暴は「高家」とは後くはる執も  
 鳥辭の癖者ありそが姓名を列挙まは赤尾主振時廣瀬  
 尾堅物新成天山双四命言を志取らぬ命を言盤園野二六  
 言を完古地く忠濃有令各佐無田命及章等田心之致  
 の盤と固め形又影の序とて難きも中うむ死生と共  
 みよりや友達の復讐と序りとも同くそ君共言究

誓ひのり遠是義不似く義ふありは彼彼侵す一飛悪の  
 復免も収うらぬむ互ふ仇と誓んば公孫とぞ知らるる  
 澄うの初らんは赤尾橋尾天山の廣瀬軍を導持世成瀬大  
 宗盈純大川八右門忠志が眼と悔まし世の人と欺く彼  
 名をうんといられ軍をうが赤尾主振と改めはうた記  
 毎まども名と時廣とも更わりの旧の名持世の持の字  
 の才と日の字にくりしもの姓の一字とわりの日彦と潜む  
 の上の時を併く世間廣くぬらんつる統の意なるは「大宗盈  
 純が摘尾堅物と抄へも復顔かまどそその名の新成とい  
 遠亦舊の成成成の字と誤例ありそ成の字の意を省し  
 のそ又國忠の旧姓大川の二字に各く一畫とわけて天山に

夏元在在集四冊卷之一

十二



曰稱八たつかりと今双四舟と改めも双の二なり二  
 四ハ八の隠格うて高遠といふ名も天山の字より出せ  
 義なりとせしれど遠三個の者ども来る四月に辭下野 國  
 うて若人重義兼之と返り懸ふあむお固あつあむ  
 に妨げらるうて重義が十々滅と利といふり」うど救急の  
 海廣と被せしよハ又生づういわけ」を妹の生死に定るふ  
 知る稱ども女流なまはゑるふとて國心を忠見重義を  
 がことなりと深敷の力量披露うて忠義勇悍又うも  
 足も遙に揚まる劉者なり彼も定年長者修好の志  
 うて行蹤定めど多傳とせくそく稱ども又と見との仇  
 ありと歩なきはて我あて観ふし彼ハ深敷ふ何あて出

今んも料の難く多困なるぬ身の大敵と生指てい片附も  
 後安うらじそ程の互ふ力と保せんふ三人各々にあまん  
 を使はは方も武者修好うて後進「勇者と意と口は  
 力ありと高儀世ハ仇と観ふ志「勇みふ似く身を獲  
 る怯く姓の名も人更しに影をほし「新く下野よりゆくと  
 経てこの辺に路ふ入るとに多くゆく後ハ結ば「因氣  
 用にお借し四名の悪女と共し七名付てこの六月の三日  
 とらうし長渡より船本へ後る船中うて船長のみのお名を  
 産名み舟をさる盤元去捨く悪徳がのうく怒に「事  
 して徳松莊多信光然とそ意と撃も果らん傳と光然  
 が即智りて人をさる傳不膳し上らる無なき身の冷く



るくおしも通ふ船をうもまひ仇と着ふ暇なく時を辨じ  
 より暴風風の湧はじく夕ふぬい歌をうら船烈しく風  
 傳ふ一疾波ぞむら目小塩津より大津へ海を船と見て登  
 瀬りしう懐くて愛と腸をと揚ぐ時日の風小船震りし  
 のうらう苛くしてけあへたぐらあし旅人なりし船人と樹  
 よく橋作を船小糸系て大津の波お着ぬ船と客舎入り  
 宿り居る肉子くも作後且漸経がらうと支やぶふ未帰  
 橋尾天山多大小船びいうで作後と務うと修練の事案と  
 別しなば作く本家ふはら役燕と侍らうあしん元より古  
 角の鋭い近衛の一大佐候うしてあつて笑く故言船船言  
 より今義賢主ふ船とと事案お軍家も後しまつらぬ  
 りありしやあつた家ふはらなを能く仇と避れと殺  
 とふ役りよく果花のまふをまへと心勇て高橋  
 七名高く大津の島と立せく妻ふゆとさして船  
 二里よりまきと坂中へ赴はしは月お目のみふなむ

繪本復讐英雄録四編卷之一終



